



<h1>指導資料</h1>  鹿児島県総合教育センター 令和3年4月発行	<h2>教育経営 第40号</h2>	
	対象 校種	小学校 中学校 義務教育学校 

「社会に開かれた教育課程」の実現をめざすカリキュラム・マネジメント
—教科横断的な指導とカリキュラムデザイン—

これからの時代に求められる資質・能力を育むためには、各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、必要な教育内容を組織的に配列し、更に必要な資源を投入する営みが重要となる。そのための具体的な進め方を提案する。

1 はじめに

教育課程の編成主体である各学校においては、学校教育目標を達成するために、教育内容を子供の心身の発達に応じ、授業時数との関連において総合的に組織した教育課程を編成し、それに基づいて組織的に教育活動に取り組み、学期末、年度末には評価・改善を行い、より適切かつ効率的な次学期、次年度の教育課程となるように修正してきている。いわゆる、PDCAのマネジメントサイクルにより教育課程の在り方を不断に見直しているが、「社会に開かれた教育課程」の実現を通じて子供たちに必要な資質・能力を育成するという新しい学習指導要領等の理念を踏まえ、これからの「カリキュラム・マネジメント」について中央教育審議会答申（平成28年12月21日）では、以下の三つの側面から捉えることが重要であると示されている。

(1) 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。

(2) 教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種デ

ータ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。

(3) 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

2 教科横断的な指導の充実

これまで、「知の総合化」という視点から教科横断的な指導が必要であると言われてきた。学校教育目標や子供たちに身に付けさせたい資質・能力は各教科等のなかでの閉じた学びだけで実現することは難しい。環境や福祉、健康や安全、防災をはじめとする時代の変化によって生じる現代的諸課題解決において、各教科等の知識や技能を関連付けて総合的に活用することが必要であり、また、そのことによって各教科等において身に付けた学力がより深い定着を図られるという側面もあるからである。また、今回の学習指導要領で示された学習の基盤となる資質・能力（言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等）や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のためにも教科横断的な学習を充実させたい。

そのためには、各教科等における学習の充実はもとより教科等間のつながりを捉えた学習を進める観点から、教科等間の内容事項について相互の関連付けや横断を図る手立ての確認や体制づくりのために全教職員で取り組む必要がある。

以上のようなことから、カリキュラム・マネジメントを進めるためには、はじめに教科横断的な視点で教育課程を編成し、教科の枠にとらわれない授業を展開することから始めることが重要ではないかと考える。

3 カリキュラムデザインの具体化

教育内容を組織的に配列すること、すなわち「カリキュラムデザイン」がカリキュラム・マネジメントの中核であると考え、その進め方を鹿児島市立田上小学校の実践を基に述べる。

(1) グランドデザインの作成

学習指導要領総則第2に「各学校の教育目標を明確にするとともに、教育課程の編成についての基本的な方針が家庭や地域とも共有されるよう努めるものとする。」とあるように教育目標はその学校の歴史や伝統、地域性、子供たちの実態が反映され学校ごとに独自に

定められるものである。グランドデザインは、その教育目標の具現化に向けて、学習指導要領で示された資質・能力の三つの柱を照らし合わせ学校が育てたい具体的な子供像を描き直し、学校全体で共有するためのものである。

鹿児島市立田上小学校では、学校全体のグランドデザインをもとに、「何ができるようになるか」、「何が身に付いたか」、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」、「実施するために何が必要か」、「子供の発達をどのように支援するか」という六つの枠組みをもとに各教科等及び学年のグランドデザインを作成している（図1）。また、図2のように学校経営、学年・学級経営、教科等経営のPDCAサイクルも確立されており、保護者とも連携が図られている。

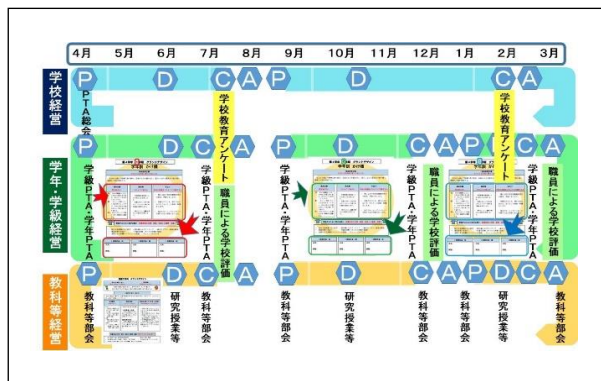


図2 年間のPDCAサイクル

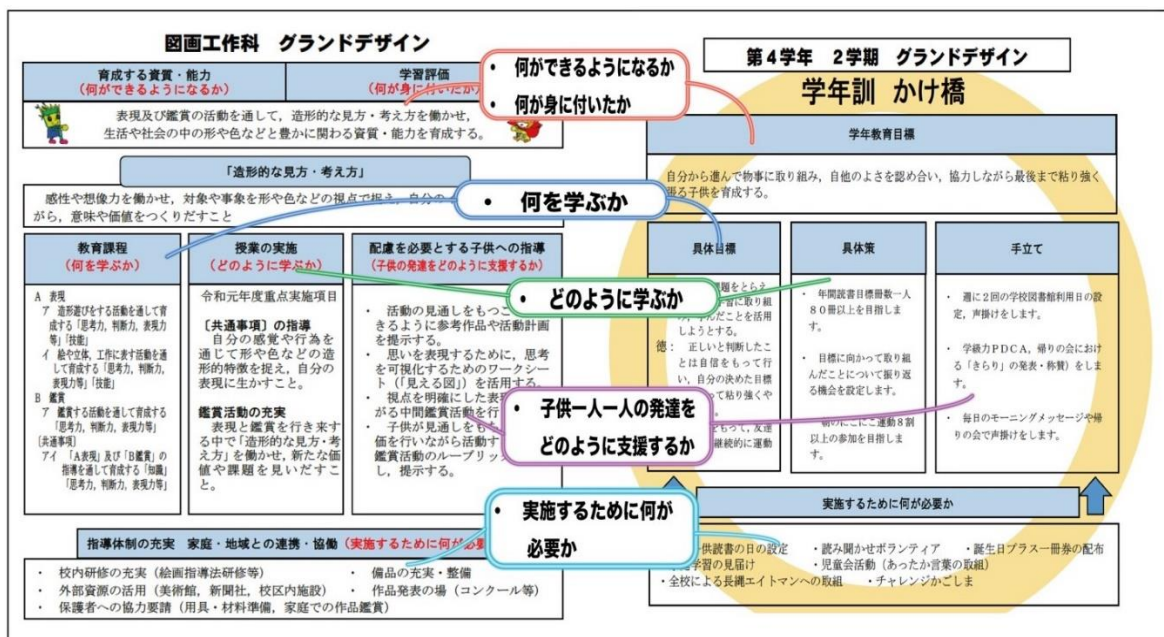


図1 各教科等及び学年のグランドデザイン



図6 図画工作科の実践例

を考えることをきっかけに、描かれている形や色、様子などの造形的な特徴に注目し、自分なりのイメージをもって書いたり話したりする」ことが目標である。

作品の題名を考える段階で、国語科で学習した三角ロジックを使って考える学習過程となっている。鶴田によれば、三角ロジックとは、以下のような思考方法である。

- ① 「根拠」と「理由」を区別することで、主張が具体的で分かりやすくなる。
- ② 「理由付け」において既有知識や生活経験をもとに類推することで、テキスト(学習内容)が〈わがこと〉として実感的に理解できる。
- ③ 意見を発表し、それぞれの「根拠」や「理由」を検討し合うことで、授業が対話的かつ協働的になる。

今回の学習指導要領では、総合的な学習の時間に次のような10とおりの「考えるための技法」が示された。

- 順序付ける
- 比較する
- 分類する
- 関連付ける
- 多面的に見る・多角的に見る
- 理由付ける(原因や根拠を見付ける)
- 見通す(結果を予想する)
- 具体化する(個別化する, 分解する)
- 抽象化する(一般化する, 統合する)
- 構造化する

※ 小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間 編第5章より

図6の実践は、その中の「理由付ける」ための思考方法である。国語科で学習した方法を、活用することをねらいとしたものである。

4 おわりに

カリキュラムデザインの具体化のためには、「つながり」を意識して日々の授業をデザインすることから始め、生活科や総合的な学習の時間を中核とした教育課程を作成したい。そのことによって各教科等で身に付けた「知識及び技能」をつながりのあるものとして組織化し直し、改めて現実の生活に関わる学習活動において「活用・発揮」することが期待できると考える。

—引用・参考文献—

- 中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』平成28年
- 鹿児島大学教育学部代用附属鹿児島市立田上小学校令和2年度研究紀要「共に学び 未来を創るIV」～「深い学び」の実現に向けた授業改善～
- 田村学『『深い学び』を実現するカリキュラム・マネジメント』2019年 文溪堂
- 林則久「教科横断的な学習に関するカリキュラム開発～小学校～」2003年 神奈川県立総合教育センター研究集録22
- 鶴田 清司「授業で使える 論理的思考力・表現力を育てる三角ロジック 根拠・理由・主張の3点セット」2017年 図書文化社

(企画課 宇都洋志)